

“反応”に見る空間条件

反応能力は、前号でも触れた通り、“速く、かつ正確に…”といった能力が最も単純に表されます。反応については、何かの刺激があって、それに対して何かの動作や行動を始めるということになりますが、こういう説明をすると、これを読んでいただいている方の中は、以前に触れた「定位分化能力」を連想する方も多いかと思います。そうです、この定位分化能力とは密接にかかわるものです。ここでは詳細なことは扱いませんが、脳における情報処理においても異なる部分が多いこと、そしてそれらの能力を獲得する上でのトレーニングや学習においても違いがあることから、コーディネーション能力としては一線を画しています。しかし、説明する上では、同じような題材を取り上げた方が、分かりやすいのではと思いますので、途中からは以前の連載で扱った問題と重ねながら話しを進めようと思います。

刺激に対して動作、行動を起こすといったことは環境条件によって決定的に支配されます。環境条件というのは、何の刺激に対して何を課題として何を行うのか…といった反応条件から始まり、刺激を受容し、行動を起こすためのやりやすさ、やりにくさといった様々な環境による制限や条件が複雑に絡んできます。全体としては、刺激の与えられ方と反応の仕方との関係ということになります。その一つの例をあげましょう。

目の前に2つの光を放つランプを置きます。それらを被験者の右方向と左方向の前に配置し、被験者は、いずれかの左右の手でボタンを押すという反応動作を課題とします。そうすると、いろいろな組み合わせ方があるわけですが、右のランプに対しては右手で、左のランプに対しては左手で反応するという条件が最も速い反応時間が得られます。一般にこの現象はサイモン効果と呼ばれていますが、いろ

ろな議論があるとはいえ、何となくそれはあり得るだろうといった気になりませんか。

もっと何気ない日常生活から考えて見ましょう。誰かにペンや書類を渡される時、右方向からだとも右手で受け取り、左方向からだとも左手で受け取ることでしょう。これは当然といえば当然で、何もわざわざ反対の手で受け取る必要はありません。利き手にはこだわりませんね。そのペンや書類を受け取った後で、持ちかえたり、持ち直したりして作業をすることになります。先ほどの2つのランプに対する反応では、決して“ランプに触れる”というのではないにもかかわらず、同じ方向、言い換えれば近い位置にある手で反応するのが速いというのは、こうした距離感と密接に関係していることになります。つまりここに空間の条件は、反応の条件に絡んでくるという、最も初歩的な関係性が登場することになります。

非常に単純な例から説明に入りましたが、このことが人間にとって反応するという行為にどのような空間の問題が関係するのかという重要な視点が含まれています。そこで、コーディネーション能力における反応能力について徐々に紐解いていくことにしましょう。

